

南高の礎－横川榎子

平 照子(昭和 32 年卒)

創設者・横川榎子女史について



校門を入ると誰でも目にしたことのある横川榎子女史の胸像。この府立第四高女一都立南多摩高校の前身、私立八王子女学校の創設者である横川女史の軌跡を、改めて紹介したい。

榎子は、嘉永 6 年(1853) 1 月、武州多摩郡横川村(現八王子市横川町)の名主、横川十右衛門の長女として誕生。父の影響で早くから学問を志し、文久元年(1861)から明治 11 年(1878)まで、主として個人的な師について多岐にわたる学業を修めた。

明治 11 年榎子 25 歳の時、東京女子師範学校(現お茶の水女子大学)附属幼稚園に保母見習いとして勤務しながら、保育法を修了。のち同幼稚園の教員に任ぜられ、明治 16 年(1883)に

は、東京女子師範学校の御用掛り・舎監などに就任するが、翌年父の死去に伴う家督相続のため、退職して帰郷する。

郷里に帰った榎子は、八王子地方の女子教育の遅れを憂い、裁縫その他の学科を授ける女子学校の必要性を痛感し、明治 21 年(1888)、八王子町の篤志家に呼び掛けて横山町に教授所を開設、10 人あまりの女子の教育をスタートさせた。

その 4 年後の明治 25 年(1892)、上野町 4 番地(現天神町)の借地 250 坪に、宿願の私立八王子女学校及び幼稚園を設立し、以後同校は多くの人材を世に送り出し、女性教育の先駆けとなった。

明治 41 年(1908)、東京府立第四高等女学校設立に際し、榎子は率先して八王子女学校の施設すべてを東京府に寄付すると共に、在校生を同校に移籍、15 年 4 ヶ月の歴史を閉じた。

なお、戦後男女共学へ移行して、昭和 25 年(1950)に都立南多摩高校と改称し、現在に至っている。

100年前の授業は？

明治 25 年(1892)11 月開校時の八王子女学校設立趣意書に「本校ハ優良ニシテ有用ナル婦女タルニ須要ナル学科ヲ授クル所トスル」とあり、入学資格は尋常小学校卒業の者、もしくはこれに相当の学力を有する者としている。本科は 1 学年から 4 学年までで、年間を通じて、入学・退学は随意であった。開校当時から明治 28 年(1895)までの入学者は 53 名、同年には初めての卒業生を 2 名出し(中途退学者あり)、29 年の在校生 29 名、卒業生 4 名。32 年は入学者 30 名、在校生 67 名。36 年には 86 名の在校生を数え、生徒数は順次増加したが、明治 37 年(1904)に日露戦争が勃発し、「下女に暇を出し、女兒の学校通いをやめて台所の手伝いをさせる」(明治 40 年の新聞)などで生徒数は減少に転じたようである。

授業は 4 月 1 日に始まり翌年 3 月 31 日で終わり、学年は 10 月 15 日までの前期と、3 月 31 日までの後期の 2 期。授業時間は季節に応じて細かく 4 回に分けられていて、夏休みの規定はない。ただし 7 月 1 日から 8 月 31 日までは午前 7 時か



【横川榎子先生(右)と生徒】

ら正午までとしている。

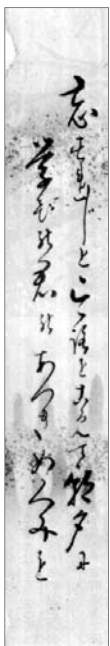
教育内容は明治 27 年(1894)ころの「教科課程表」によると、修身は各学年とも必須、それ以外は希望選択、1 週間の授業時間は 30 時間(50 分授業で 10 分休憩)と規定されている。本科第 4 年の科目内容を見ると、修身 3、読書・国語 5、作文 2、習字 2、数学 3、地理・歴史 3、裁縫 9、手工(編み物) 1、唱歌 1、遊戯(体育) 1 の通計 30 時間となっている。

その後明治 32 年(1899)改正の「教科課程表」では、良妻賢母育成の教育理念から裁縫が週 12

時間にも増加し、数学も実用的な筆算分数、比例、珠算などが課せられている。明治 39 年(1906)「週案」で、教科内容の一部をみると、本科 4 年の西洋史では「えじぷと」、日本外史「源氏後記・北条氏」、西洋史「ふえにきや・へぶらい」、家庭婦人育成の新しい科目「生理衛生を学ぶ目的」、そのほか国語「読本七巻」、文法、作文や植物学なども学んでいる。

100 年以上を経た現在から見ても、当時の女学生たちが実に変化に富み、多岐にわたる学習をしていることに驚かされる。

苦難の運営— 第四高女誕生へ



横川楳子女史(写真左は本人筆跡)は明治 25 年(1892)11 月、当時はおろそかにされていた女子教育の向上と充実を理念に、八王子町では初めて女子・幼児を対象にした教育機関「私立八王子女学校」を創設した。

しかし明治 41 年(1908)3 月、第 13 回卒業生を送り出した後、同年 5 月開校の府立第四高等女学校に、在校生、施設など全てを移管するまでの 15 年余り、その経営状態は常に苦境に立たされていた。毎年収入を上まわる生徒たちへの教育投資が行われ続けた結果であった。

赤字には私財を投入し、篤志家の寄付を仰ぎ、必死の努力を続けながらの女学校経営であったが、明治 27・28 年(1894~95)の日清戦争、明治 30 年(1897)の八王子町大火をきっかけに生徒数が激減し、篤志家からの寄付金も不景気のため減少、経営状態はより悪化した。さらに明治 37 年(1904)、日露戦争の勃発により退学・休学者が続出し、学校の存続そのものが危ぶまれる窮地に陥ったのである。

明治 32 年(1899)に高等女学校令が公布され、東京府は府立第一高等女学校(現都立白鷗高校)、府立第二高等女学校(現都立竹早高校)、府立第三高等女学校(現駒場高校)と順次開校していった。そこで明治 39 年(1906)八王子町議会は第四高等女学校を誘致すべく、在校生 60 数名を抱え、大きな成果をみている私立八王子女学校が閉校の悲運に

ある旨と、女子教育の必要性を東京府へ訴え、校地 6,000 坪(現在の校地)の寄付を申請、楳子女史も校舎・施設など一切の寄付を申し出て受理された。100 年前の明治 41 年(1908)5 月 1 日、ここに東京都立南多摩高等学校の前身・東京府立第四高等女学校が誕生したのである。

こうして生徒・施設などすべてを第四高女に移管した楳子女史は、永年の女子教育に貢献した功績により、同年、東京府知事及び八王子町長より感謝状を贈られている。女学校閉校後、楳子女史は学校教育に従事することはなかったが、大正年間、八王子婦人会が結成されると会長に就任し、今度は既婚婦人の教育活動を行っていく。生涯を独身で通し、女子の教育に情熱と精魂を傾け続けた楳子女史は、大正 15 年(1926)1 月 3 日、南多摩郡横川村横川家で 73 年の生涯を閉じた。現在も同地(現八王子市横川町)に、女史の長兄のご子孫が健在で、横川家と楳子関係の多数の資料を守っている。



【現在の横川家】

*この記事は広報紙「南高 100 周年」にシリーズ連載したものである。(資料:八王子市立郷土資料館発行「明治時代の八王子の教育と横川楳子」「明治時代の八王子」「八王子市議会史・年表編」,「東京教育史資料体系・第 8 巻」・明治時代の八王子)